

小林平八教授を偲ぶ

体育学部長 猪俣 公 宏

小林教授は1959年4月に本学部助手として赴任され、以来40年間にわたり本学部の歴史とともに歩まれてきた。その間、バスケットボールの指導や競技方法の研究をテーマとされ、数多くの教え子を世に送られてきたことは周知のとおりである。

私と小林教授との出会いは8年ほど前になる。私が中京大学に赴任した年の暮れのことであるが、故松田岩男先生と小林教授との間柄を面白い話で説明していただいた。この話の内容については別の機会に譲るがそれまでどちらかと言えば近付き難い人だなと感じていた先生が急に身近にしかも親しみやすく感じられるようになったことを明確に記憶している。正直でまっすぐな性格とユーモアのある温かみを感じたのである。

小林教授とは日本体育大学においてともにバスケットをされ、親友でもあった能代工業高校の元監督の加藤広志氏のご自宅へ伺ったおり、加藤氏との話のなかで、小林教授のかつてのバスケットボール選手現役時代の活躍ぶりや、その後のさまざまなエピソードなど興味深い話があった。この話の中で、加藤氏は小林教授について“かれはいわゆる勝負師ではなかった。”としみじみと語られた。加藤氏は言うまでもなく、高校インターハイ30連覇の偉業を達成された経験を持つバスケットボール界の大ベテランであり、卓越した教育者である。勝負師ではなかったという先生の言葉はそのまま私のいただいていた小林教授の人格像にぴったりあてはまっていたので、妙に感心してしまったことを覚えている。スポーツはいうまでもなく教育の一手段として有効な媒体であるが、勝敗といった側面からみると非倫理的な要素も同時に持ち合せている。ドーピング問題をはじめ、枚挙にいとまがないほどの例をあげることができよう。バスケット競技を例にとれば、如何に相手にフェイントを掛け、こちらに有利な状況を作るかは方略の一つの基本である。しかし、小林教授はこのような姑息な方法は好まれず、先手必勝をオフェンスの要とし、つねにスピードと正面からの攻撃を中心に“正直な”フェアプレーに徹するバスケットを指導された。おそらく小林教授の教育者としての姿勢のなかにバスケットによって人をつくるという大きく、重いテーマがあったのではないだろうか。

代々木の国立体育館におけるインカレで、最後の指導となった場面にたまたま居合せた一人として、文字どおり命を掛けられたあの先生の姿を生涯わすれることはないだろう。今、思い出してみるとあの場面はスポーツにおける勝敗を越えたところすべてをかけた指導者としての生き様をみせられたように思える。

「信頼こそが勝負のポイントである。心の真底からにじみでる監督の良心と正義は説明する言葉に不足があっても、選手の理解度は高く、緊急な場ほどあらわれてくる。監督の勝負に対するあくなき執念が昇華されるとき、スキンシップを反映させる。それが信頼を生む。」(梅村清弘、小林平八共著、コーチの社会学、大修館書店、より引用)

ここに引用させていただいた小林教授の記述はまさに言葉で語りかける以上に指導者の生き様そのものが選手とのコミュニケーションの基盤になっているという主張であり、コーチングとは教育そのものであるという先生の原点がその背景に在ったと言えよう。スポーツ科学最優先のコーチング論に対し、教育としてのコーチング論を解かれた先生のお考えは浅学な小生には正直にいつてもまだまだ対岸の景色を見る思いがしてならない。しかし、“Bridge the gap”を目指すわれわれにとって先生には多くの大切なことを学ばせていただいた。

最後になってしまったがこれまでの先生の温かいご指導に心から感謝申しあげ、ご冥福をお祈りし、この拙文を捧げたい。